広島大学附属中・高等学校研究紀要
〈第49号 二〇〇二〉

思考を鍛える

――ディベートから小論文へ――

岡本恵子
谷口邦彦
三根直美

私たちが提案したいのは、誰でもできる小論文指導である。そしてここにいう小論文指導とは、小論文を書くための指導ではない。小論文を書けるだけの力を育てる指導を目指しているのである。小論文を書くには、資料収集力・分析力等々の様々な力が必要で、そうした力を磨くことが、思考を鍛えることにつながる。どのようにすればそれが可能になるか、今回の実践で明らかになったのは次の点であった。

まず、生徒を中心に据えること。学習活動の中身とその流れを分かりやすい形で示せば、生徒自身で進めることは十分可能である。ディベート、小論文という具体的な学習活動を置いたのも、そのためである。また、評価は、生徒の相互評価を中心にする。子どもにとっても評価する側に立つこと、相互理解の深まり等において予想以上に効果的であったし、教員の負担も最小限ですみ、むしろポイントを押さえた指導が可能になった。

次に、多様な教員による指導を総合学習に位置づけることが、現状ではベストであろうということ。テーマの多様さを指摘するまでもなく、ものの見方、考え方を育てるためには多様な集団での指導が望ましい。また継続的な取り組みが必須のこうした学習は、限られた教科の時間数では望むべくもないが、総合的な学習であれば可能になる。

個々の教員の指導力に依存しない形でのこうした小論文指導こそ有効であるという感触を得られたことは、大きな収穫であったといってよかろう。

一　はじめに

生徒の実態として、自己の生活圏を越えて広い視点で問題をとらえたり考えたりすることのできる生徒が少なくなってきたように感じられてならない。社会問題はいうに及ばず、直面するはずの進路選択においてさえ、どれほど深く関心を寄せて、広く資料を集め、現実をふまえて情勢を分析し、積極的に考えようとしているのか。関心がないわけではなかろうが、友人同士では日常会話や軽い話題に終始することが多く、メディアから溢れてくる情報は断片的に受信するのが精一杯の様子である。そのこともあってか、平生の授業でも、実際の社会や、あるいは自分自身の問題として考えることは容易とは言えない。ましてや、中身の濃い小論文を書くことなどはおぼつかない。

現実の社会の一員として生きるということに立脚点を置いたとき、否が応でも深い思考が必要になってこよう。深い思考は、しかし、今や機会を作って、育てる取り組みを必要としているのではなかろうか。機会とは何か。問題意識を持って調査、分析、それをふまえて考え、意見を持ち、それを他者との交流で吟味、検討する、その手順を知り、楽しみを知る機会があれば、それを次に生かす意欲がわくのではないか。その意欲を喚起する取り組みが、今必要とされていると考えたのである。

そこで二〇〇一年度の高Ⅱ現代文のうち、岡本・谷口、三根が担当した三クラスについて、一つの取り組みを試みた。ディベートを媒介とすることで、楽しみながら思考を鍛え、充実した内容の小論文を書き上げた達成感を味わうことを体験させられはしな

Developing the Ability to Think: From Debate to Essay
Keiko OKAMOTO, Kunihiko TANIGUCHI, Naomi MINE

いかという発想のもと、試みた実践である。

二　授業の実際

Ⅰ　準備段階…様々な考え方があることを知り、記名の上で、教室の場での意見交流に馴れる段階。

二〇〇一年8月25日付の朝日新聞に掲載された「フォーラム朝日ひろば『十七歳』を語り合おう」での意見を四つ採り上げ、それについて各自の考えを書かせた。（プリント①）それぞれの意見ごとに書かせた考えを分けて、模造紙に直接貼り付け、教室の後ろに掲示し、みんなの意見が見えるようにした。さらに10人の考えについての分析評価をさせ（プリント②）、交換し合い、意見交流の場を設定した。

Ⅱ　ディベート段階

夏休みの宿題として、自分が気になった「現代社会の諸問題」を十項目取り上げてこさせた。（プリント③）

夏休み明けにプリント③を提出させ、全員分を分野ごとに分けて一覧表にして提示した。（プリント④⑤）

さらに、ディベートの論題にふさわしい形にしていくつかを提示（プリント⑥）した中から、ディベートで取り上げてみたいものを投票させ、5～7の論題に絞る。好きな論題を選び、グループに分かれた。

プリント①

Ⓐ

Q メールや携帯電話でしか友達関係を保てない、現代の豊かさの中にある貧しさをどう思いますか。

高校生　岩永　尚葉さん(16)　京都市

メールで一喜一憂している人が多い。返事がないと「友達じゃない」と怒ったり、送らなかったら嫌われると圧迫を感じたり。私は携帯を使っていません。私にとって友達とは、一番しんどいときに自分を理解してくれる人です。価値観の合う人も違う人もいる。ひとりのときふと、周りにいろんな人がいてくれて幸せだなあと思うんです。

Ⅱ年　組　番　名前（　　）

Ⓒ

Q 17歳、17歳と、「17歳」でひとくくりにしないでほしいと思います。

予備校生　柳田　悠江さん(18)　奈良市

記年生まれと言うと、「ああ、あの年」と言われるんです。14歳のとき、神戸の児童連続殺傷事件があり、17歳で高速バスジャック事件がありましたから。17歳の多くは部活に夢中だったり、学園祭の準備に忙しかったり、高校生活を楽しんでいます。容疑者が同い年だといっても、どんなことを考えているのか理解できるわけではありません。

Ⅱ年　組　番　名前（　　）

Ⓑ

Q 将来やりたいことが何なのか見えない。すごく漠然としているんです。

大学校生　奥名　利栄子さん(23)　神戸市

10代のときもいまも、これからどうしようと思い続け、定まりません。自分はこれをしていく、というものが見つからないのです。いま国際協力政策を専攻していますが、大学で学んだアルゼンチンの研究をもっと深めたいという気持ちもあるし、ほかのことにも興味があります。大学院を修了した後どう進むかは、まだ保留です。

Ⅱ年　組　番　名前（　　）

Ⓓ

Q あまり自分の意見を言わないようにしている。友達が受け止めてくれるかどうかわからないから。

高校生　中島　由希子さん(17)　広島県福山市

中学のころからの友達グループが本音で言い合ってけんかになって、以前ほど仲良くできなくなりました。お互いの不満や欠点を本音で言い合いたいと思うけれど気が引けてしまう。でも、表面的にしか付き合えないのもつらい。それで、もやもやした気分になります。思い切って本音を言ったら意外とうまくいくかな、とも考えているんです。

Ⅱ年　組　番　名前（　　）

プリント②

分析評価プリント

Ⅱ年（　）組（　）番　名前（　　）

評価は　A：大変よい　B：ふつう　C：もう一工夫ほしい

分析者の名前	評価	ひとことコメント

プリント④

現代社会の諸問題

2001. 9. 14

【経済】
株価暴落（7）　不景気・就職難（6）　リストラ問題（3）インフレ政策のおそれ　アメリカ景気悪化気味　失業率５％（13）セーフガード（緊急輸入制限措置）
外国人の不法滞在労働　特殊法人民営化（2）　資本主義の中に生じる矛盾
公団事業の無駄
【国際】
米ミサイル防衛（3）　パレスチナ問題（3）　米軍駐留（2）　北方領土
日米安保の必要性　人口増加
【政治】
靖国神社参詣問題（15）　痛みを伴う改革・聖域なき構造改革（3）官庁の隠蔽や汚職・外務省不祥事（11）
【環境問題】
ゴミの廃棄場問題（6）　地球温暖化（7）　化石燃料の枯渇（2）天然記念物の保護徹底　京都議定書の日本の立場について（7）森林伐採による砂漠化問題　環境ホルモン　オゾン層の破壊（3）
【軍事】
核兵器保有・原発問題・核戦争の危機（4）　民族紛争
戦後処理の問題　補償（3）　自衛隊　平和ぼけ　テロ（2）
【教育・文化】
教科書問題（11）　学校教師のセクハラ増加（3）　幼児虐待増加（10）
不登校　いじめ・引きこもり（3）　学力低下　ゆとり教育の導入
大学入試採点ミス　文化の荒廃
【法律】
少年犯罪の激化（6）　凶悪事件の低年齢化、増加（3）　夫婦別姓の問題
精神病患者の犯罪の裁き方
【情報社会】
出会い系サイトの危険性（2）　ネット犯罪　著作権の無視（ネットでの流出）
携帯電話のマナーの悪さ　マスメディアの道徳観の欠如・プライバシーの侵害（2）
【医療】
薬物　医療ミスの多発（4）
【科学技術】
遺伝子組み換え作物（2）　クローン人間　発達した科学の乱用
【社会現象】
離婚率の増加（2）　少子化（5）　凶悪犯罪の激発　自殺者の増加（3）
性差別　部落差別　ことば狩り
【福祉】
老人介護の問題・高齢化（8）

プリント③

夏休みの課題　国語Ⅱ　現代文

Ⅱ年　組　番　名前（　　）

★現代社会における諸問題を１０個探してきて、次にあげなさい。その情報を得た場所（テレビ・新聞・親・雑誌など）も明記しておくこと。提出は九月最初の現代文の授業の時です。

諸問題	情報を得た場所
①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	
⑦	
⑧	
⑨	
⑩	

プリント⑤

【夏休みの課題】　2001.10.5

現代社会における諸問題

普遍的な問題
○人権差別
○女性差別問題
○ジェンダー

国際問題
○アメリカのテロ事件への報復
○南北問題　2
○米国ABM問題
○先進国と発展途上国との格差
○海賊問題
○アメリカが大陸間弾道ミサイル発射実験　2
○核兵器廃絶への動き遅れ

環境問題
○地球の温暖化　4
○有明海の干潟の問題
○諫早湾干拓事業を縮小
○米国京都議定書離脱問題　3
○ダイオキシン汚染
○イリオモテヤマネコ絶滅の危機
○ディーゼル排ガス規制

政治
○歴史教科書問題　9
○小泉首相の靖国神社参拝　11
○北方領土問題　3
○日ロ平和条約交渉
○首相の集団的自衛権見直し発言問題
○参院選投票率が低かった問題
○総理大臣が予算を減らすことを宣言
○ODA問題
○参院選での自民党の圧勝
○投票率の低下
○食糧自給率の低下
○原子力政策の見直し

経済
○株価の下落・低迷　4
○不況の問題、構造改革　2
○不良債権残高2005年に10兆円

産業
○鉱工業生産5ヶ月連続減少
○H2A打ち上げ成功　2
○遺伝子組み換え食品の安全性

社会
○ハンセン病訴訟
○失業率過去最悪5%　7
○被爆者手帳を作れない
○インターネット犯罪の増加　2
○個人情報の保護
○ストーカー問題
○少年犯罪の増加、凶悪化　2
○介護保険制度の問題点　2
○少子化問題　4
○迷惑メールの被害増加
○IEの最新verをDLしてUPDATEすると操作が不安定になることが発覚
○地震対策
○過激なダイエット
○味覚障害
○沖縄米軍基地の軍人による事件多発　2
○来日外国人犯罪増加
○働き盛り健康悪化
○プロ野球人気の低下

教育
○幼児虐待が増える　7
○不登校の児童生徒増える　4
○学力低下問題　3
○ゆとり教育の問題点
○中学校での校内暴力増加　2

事件・事故
○外務省の腐敗　5
○警察の不祥事再発　2
○警察官刺される
○猛暑、熱中症増加　6
○猛暑、ダム貯水率低下
○クーラー病　2
○歌舞伎町で爆破事件
○えひめ丸の引き上げ難航
○花火大会で死亡事故　2
○デオデオ大改装
○警察官とそれを刺した男同士討ち
○少女誘拐事件、無事
○オーストラリアで少女誘拐
○サメ絶息宣言被害は1500万円
○高祖派選挙違反事件郵政局長関与
○社長失踪事務所に血痕
○安室さん所属ライジングプロ20億円申告漏れ
○ネットの彼女に会いたくて無免でバイク600キロ

三

プリント⑥

2001.10.12

ディベートテーマ候補一覧

1　夫婦別姓　是か非か
2　諫早湾干拓　是か非か
3　靖国神社　首相の参拝は是か非か
4　アメリカによる報復攻撃　是か非か
5　日米安全保障条約改正　是か非か
6　核兵器保有　認めるべきか、認めざるべきか
7　特殊法人民営化　是か非か
8　郵政民営化　是か非か
9　消費税引き上げ　是か非か
10　日本における英語の第2公用語化　是か非か
11　日本における陪審員制度導入　是か非か
12　死刑存続　是か非か
13　首都移転　是か非か
14　少年法改正　是か非か
15　マスメディアによる実名報道　是か非か
16　終身雇用制　是か非か
17　原発　廃止すべきか否か
18　ボランティア義務化　是か非か
19　脳死による臓器移植　是か非か
20　脳死は人の死か　否か
21　安楽死　是か非か
22　癌の告知　是か非か
23　クローン人間　是か非か
24　代理出産　是か非か
25　自殺　是か非か
26　商業捕鯨再開　是か非か
27　遺伝子組み換え食品　是か非か
28　新しい教科書採択　是か非か
29　ゴミ有料化　是か非か
30　校則は必要か、不要か
31　教育現場における体罰　是か非か

【論題】

Ⅱ―3　①自衛隊は必要か否か　②凶悪犯の死刑は是か非か　③安楽死は是か非か　④がん告知をすべきか否か　⑤アメリカは軍事報復すべきか否か

Ⅱ―4　①夫婦別姓は是か非か　②靖国神社首相の参拝は是か非か　③アメリカによる報復攻撃は是か非か　④クローン人間は是か非か　⑤代理出産は是か非か　⑥自殺は是か非か

Ⅱ―5　①自殺は認められるか否か　②死刑存続は是か非か　③首都移転は是か非か　④ゴミの有料化は是か非か　⑤首相の靖国神社参拝は是か非か　⑥クローン人間は是か非か

「ディベート甲子園'98」（高校決勝　論題「日本は積極的安楽死を法的に認めるべきである。是か非か」）のビデオ視聴後、プリント⑦でディベートの雰囲気を知る。

プリント⑦

「ディベート」

Ⅱ年　　組　　番　名前（　　）

●ビデオを視聴して、次の（　　）に入る言葉を書き入れなさい。

フォーマット［ディベート甲子園で実施されたもの］

①肯定側（ア　　）……提示されたメリットについて、なぜこのメリットが生まれるのか、（発生過程）メリットがどれほどよいことであるか（重要性）が説明される。
②否定側質疑　……相手側が示した（ア　　）の不明点をただしたり、用語の定義、論点の明確化などをはかる。
③否定側（ア　　）……提示されたデメリットについて、なぜこのデメリットが生まれるのか（発生過程）、デメリットがどれほど悪いか（深刻性）が説明される。
④肯定側質疑
⑤否定側第一（イ　　）……肯定側の出したメリットに反論を加え、さらに否定側の論を補足し、デメリットの深刻性を強調する。
⑥肯定側第一（イ　　）
⑦否定側第二（イ　　）……メリットとデメリットを比較しながら、全体の議論を総括して否定側が勝ちであることを結論づける。
⑧肯定側第二（イ　　）

●ディベートの経験は
ある　　ない

ある人はいつしましたか。

どんなテーマでしたか

●ディベートのビデオを視聴しての一言感想

グループ内での準備作業。

自分たちの論題について、考えられることを挙げさせる。（プリント⑧）また、展開の手引き（プリント⑨）で流れの概要を把握させる。

資料集め（封筒の表面にプリント⑩を貼ったものを各グループに渡し、資料収集をさせた。）

ディベートの展開に従って、下原稿（プリント⑪）を作成する。

進行の担当者を決定し、ディベート・マッチの日時を伝える。（プリント⑫）

プリント⑧

論題

肯定　　否定　　年（　）組（　）番　名前（　　）

考えられる根拠	考えられる根拠
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
必要資料の予想	必要資料の予想

プリント⑨

〔展開手引き〕

予め　先攻（A派）　後攻（B派）を決めておく。

〈第一段階〉立論（主張宣言）　A派　・　B派　各　1分
〈第二段階〉立証　A派　・　B派　各　3分
※　作戦タイム　計　2分
〈第三段階〉質疑応答　（1）反対尋問　B派　・　A派　各　2分
（2）応答　A派　・　B派　各　4分
※　作戦タイム　計　4分
〈第四段階〉論戦・反駁　順不同（挙手による）　計　8分
※　作戦タイム　計　1分
〈第五段階〉結論（主張の確認）　各　1分
※　判定会議
※　審判長より　判定及び判定理由説明
〈終結〉記録用紙記入、提出（全員）

プリント⑩

ディベート資料

論題

班員名

資料一覧

番号	資料の出所(題名・著者名・アドレス等)	どこで使えるか
①		
②		
③		
④		
⑤		
⑥		
⑦		
⑧		
⑨		

プリント⑪

準備プリント
テーマ[　　]　立場（　　）側
メンバー：

1）立論　　発言者：
要点

2）予想尋問と反駁　　反駁担当者：

3）反対側立論（予想）
要点

4）予想尋問　　尋問者：

5）資料

プリント⑫

第一回　**論題「アメリカは軍事報復すべきか否か」**　□月□日

ディベート担当班は、授業中前に机の配置・板書等、準備の呼びかけをして、態勢を整えておいてください。

すべき派	
否派	

進行等担当班　①班・②班

司会	計時係	審判長	審判

第二回　**論題「凶悪犯の死刑は是か非か」**　□月□日

ディベート担当班は、授業中前に机の配置・板書等、準備の呼びかけをして、態勢を整えておいてください。

是派	
非派	

進行等担当班　⑦班・⑧班

司会	計時係	審判長	審判

五

ディベート展開フォーマット（プリント⑬）を元に、展開をイメージさせる。

ディベート・マッチ

ディベートをするグループ、進行グループ以外の生徒はディベート記録（プリント⑭）を書く。また、ディベートをしている班にはディベート・フローシートに記入させる。（プリント⑮）

ディベートを終えて個人・グループでの反省（プリント⑯⑰）を書く。

プリント⑬

ディベート展開フォーマット

状況に応じて適宜司会者が判断し、工夫してください。なお、どちらかの要請があれば各１分、２回まで、作戦タイムを認め、明確に指示をしてください。

〈第１段階〉

司会　これから「　　」というテーマでディベートを行います。
向かって右側が「　　」、左側が「　　」です。
まず、立論を述べてください。
時間はそれぞれ「４」分ずつ、肯定側から始めてください。
…
時間です。今の立論に対して、否定側から質疑を行ってください。時間は「３」分です。
…
時間です。終えてください。

〈第２段階〉

司会　それでは、反駁に移ります。
時間はそれぞれ「３」分ずつ、否定側から始めてください。

否定側　（例）今述べられた、「　　」と「　　」について質問します。
まず、「
次に、
…
質問は以上「　　」点です。

肯定側　（例）ただいまの質問にお答えします。
まず、
次に、
…
以上の理由から、私たちは「　　」と主張します。

〈第３段階〉

司会　つぎに論戦に移ります。それぞれ手を挙げて、司会の指示を受けてから発言してください。時間は全部で「８」分です。
＊　自由に挙手し、積極的に発言する。まだ発言していない人も、ここでは必ず発言するようにする。
＊　司会は状況を判断し、不公平の無いように配慮するとともに、議論が活発になるように促す。

〈第４段階〉

司会　それでは、今までのやりとりをふまえて、結論をそれぞれ述べてください。
時間はそれぞれ「１」分ずつ、肯定側が先に述べてください。
…
以上で「　　」についてのディベートを終わります。
審判団が判定会議を行う間、皆さんは記録用紙を記入していてください。

〈判定〉

司会　ただいまから、審判長から判定および判定理由の説明があります。

プリント⑭

ディベート記録　Ⅱ年（　）組（　）番　名前（　　）

第□回　テーマ

一　判定　自分は　側　の勝利だと判定する。

投票

もう少し聞きたかった、もう少し深めてほしかった点

二　審判の判定

理由　適切　まあまあ適切　どちらとも言えない　やや不適切　不適切

三　ディベートを終えて

プリント⑮

ディベート・フローシート

①肯定側立論（４分）	②否定側立論（４分）	③否定側質疑（３分）	④肯定側質疑（３分）	⑤否定側第一反駁（３分）	⑥肯定側第一反駁（３分）	⑦論戦・反駁（８分）

プリント⑯

ディベートふり返りシート（個人）

Ⅱ年　組　番　名前（　　）

●次の各項目について、次回気をつけていくべきこととして、今回のディベートを体験して感じたこと、ここをこうしたらよかったと思う点を次の各項目について整理してみよう。それにしたがって、次回気をつけていくべきことと、後輩へのアドバイスの形で**具体的に箇条書きにして**みよう。

例・「とにかくしゃべりまくる。」などというものではなく、「ここの場面では、こう切り返す」などというように実践に役立つように書いてください。

①ディベートに向けての準備において

・
・
・
・

②実際のディベートにおいて

・
・
・

③司会、審判において

・
・
・

④ディベートを聞く側において

六

プリント⑰

ディベートふり返りシート（班）

II年　　組　　班　班員名（　　）

●クラスの人たちの評価を見て、また班内で冷静に自分たちの班の行動をふり返って書いてください。

①準備において

②実際のディベートにおいて

③司会・審判において

④ディベートを聞く側において

個人の書いたポイントを一覧表にして提示し、ディベートのまとめとする。（実際に配布した3クラスのプリントからの抜粋を次に挙げる。）

①準備について

資料集め

・一人がすべて知っているのは×で、みんながすべての資料に目を通し同じ程度知っておくことが大事。
・資料は見やすい形に整理すること。
・憲法ネタは学ぶのは大変だけど、味方につけるとかなり強い。
・数値などは、説得力があるので調べるべき。
・必ず全員で図書館に集合&相談。（資料が多いし強制的に静か）
・テレビも見て、ビデオを録る。
・早くから出来るだけ多くの資料を集める。相手側の資料も含めて。
・多く資料がある方が強い。人数がいるなら、内容で分担して、ここが言われたときは誰が反論するというのを決めておく。
・相手が使いそうにない資料を利用する。
・資料の大切な部分に線を引いて、一度その部分を頭の中で文にしよう。
・自分たちに不利なデータも集める。
・過去の史実を調べるのにネットはあまり向いていない。
・本の方が論調がそろっていて意見を絞りやすい。
・ディベートの方法についての資料も見ておくとよい。
・曖昧だったり、古いデータは参考程度に。
・資料を理解するまで読み込む。

立論・その他

・とにかく立論には力を入れること。立論で勝敗が6割決まる。
・相手が言ってきそうな、または反論してきそうな事を予測して、対応策を考える。
・立論をとにかく煮詰める。
・自分たちと相手側の質問を具体的にまとめておく。
・相手側への反論も具体的に。
・相手側になったつもりで考えることが必要。
・相手の言うことを十通りほど予想しておく。
・現場にいる人の話があれば、取り入れるのがよい。より現実味を帯びた主張が出来る。
・準備した情報が多いと、実際の時に見つけるのに時間がかかるので、見やすいカードなどを作って置いた方がいい。
・シミュレーションをするべき。

②実際のディベート

・必ず論点のすり替えが行われるので、その都度指摘するといい。

・質疑に対する応答は少し時間をかけてもいいから、相手や審判団に理解されるような答え方をする。

・ここに反論しようと言うところだけをメモをする。

・一分間の準備時間はすぐに終わってしまうので、相手が言っている間に何を言うか考える。

・審判や聴衆を敵に回すので、極論で押すのはやめましょう。

・自分側の主張に明らかに問題があるとわかっている場合、それの改善点、等も含めて自分たちの意見として立ててしまうと反撃するときやりやすい。

・反論出来なさそうなときは、その話題を終えてすぐに違う話題に切り替える。

・少し難しいことを言うと相手が考えるから難しいことを言ってみる。

・自論は完全に捨てること。

・資料の棒読みはしない。自分の中でアレンジする。

・テーマに対して具体的にどうしたらいいのかというのをあらかじめ考えておくと説得力があると思う。

・相手側の主張で、「～という傾向がある」「～と言うことが多い」など曖昧な発言があった場合、具体的なデータを引用して反論する。

・相手側が主張の根拠としている事例などが信頼できるものかどうかについて、問いつめる。

・沈黙は続けない。相手の話をよく聞き、自分の意見をしっかりもった上で頭を回転させて対応する。

③聞く側

・人のディベートを聞けない人はディベートをしても注意が足りなくて肝心な部分を聞き逃す可能性が高い。

・両側の資料をコピーしてみんなにも配ってみては。そうすれば話がわからないなんて事は減ると思う。

・メモを取りながら、今それぞれが何を言い合っているのかを考えながら聞く。

・題目についての自分の意見をしっかりと持った上で両方の意見を聞く。

・ディベートをしている側に失礼のないよう、また、自分の考えを深めるためにもしっかり聞くべき。

Ⅲ　小論文段階

小論文の書き方について、説明をし、好きなテーマを選んで小論文（八百字以内）を書かせる。一クラスについては、ワードを使ってパソコンで書かせた。何回もの推敲を加えやすくするためである。清書のみ、手書きで提出させた。

全員分の小論文を印刷して冊子にし、一人十人程度の相互評価（プリント⑱）をする。評価する十人については、全員に評価が行き渡るよう、出席番号から割り当てした。（プリント⑲）

四　成果と課題

■ディベートの効果

ディベートの賛否については様々に議論されているが、今回の実践においてはディベートという場を提供したことで、生徒間での対抗意識が芽生え、資料収集や立論、答弁の準備をより促していったことは確かである。また、グループ内での話し合いや、ディベート・マッチの場での生徒間に

プリント⑱

小論文番号 ［　　］ 各項目は（1－2－3）で採点
総合評価は（A－B－C－D）

表現		内容	
表記の正確さ		論理の一貫性	
語句の適切さ		根拠の明確さ	
文法の正しさ		分析の深さ	
表現の分かり易		具体例の適切さ	
段落構成		説得力	
修辞的工夫		独創性	
小　計		小　計	

総合評価

小論文番号 ［　　］ 各項目は（1－2－3）で採点
総合評価は（A－B－C－D）

表現		内容	
表記の正確さ		論理の一貫性	
語句の適切さ		根拠の明確さ	
文法の正しさ		分析の深さ	
表現の分かり易		具体例の適切さ	
段落構成		説得力	
修辞的工夫		独創性	
小　計		小　計	

総合評価

2年（　）組（　）番　名前（　　）

プリント⑲

小論文をしっかり読んで、自分なりに評価できる観点を育てよう。

自分の出席番号の末尾（1桁の数字）を下欄の左側から探し、その右にある番号の小論文を読んで評価してみよう。

1	1	5	9	13	17	21	25	29	33	37	41	
2	2	6	10	14	18	22	26	30	34	38		
3	3	7	11	15	19	23	27	31	35	39		
4	4	8	12	16	20	24	28	32	36	40		
5	5	9	13	17	21	25	29	33	37	41		
6	6	10	14	18	22	26	30	34	38	1		
7	7	11	15	19	23	27	31	35	39	2		
8	8	12	16	20	24	28	32	36	40	3		
9	9	13	17	21	25	29	33	37	41	4		
0	0	14	18	22	26	30	34	38	1	5		

・作品の良い点、課題を残す点を見抜くようにしよう。
・総合評価は、相手によくわかるように評価の根拠を説明するとともに、気づきや改善点での提案があることが望ましい。

おける交流は、日常のそれとは全く違った、意見や考え方をぶつけ合うものに見えた。ディベートの手順や要領さえ飲み込めれば、二回目からはあまり時間を取ることなく、スムーズにディベート・マッチが実施できるであろう。

ただ、水掛け論的なディベートに終始したグループでは、ディベートが小論文の役には立っていなかったことを生徒自身が残念がっていた。論理の深まりが必要であることを実感できただけでも収穫であろう。

実際に本当の意味での論理のぶつかり合いにまで高めていくためには、もう一回ディベートを行いたいものである。初めのディベートで失敗した点や反省点を生徒に書かせ整理させたが、それを実際に二回目のディベートで克服できるよう取り組ませてこそ、さらに意欲的に取り組ませることができる上に、生徒自身が自己と集団の成長を実感でき、その後の学習目標の明確化に結びつくからである。

さらに二回目のディベートのビデオを視聴したり、テープ起こしをしたりすることにより、客観的に自分たちの話法、議論の中味等を検討する機会を作っていくと、思考はさらに鍛えられるに違いない。

資料収集力

実際に生徒が資料収集した方法は、ほとんどがインターネットや新聞であった。なかには、憲法を味方に付けたり、図書の方が論調が揃っていて、意見を絞りやすいということにまで、気づいている生徒もいたが、インターネットで安易にテーマのみ（たとえば「臓器移植」）打ち込んで検索した資料だけで、発展が見られない部分があった。「医療」「ドナー」「ソーシャルワーカー」など関連していく事柄で広がりを見せた資料収集にはなっていなかった。

このとき、教員なり司書なりがアドバイスできる場面があったケースでは、生徒にとって思いがけない資料の発見があり喜ぶ姿も見られたが、多くはそういうわけにはいかなかった。ティームティーチングや司書教諭の側面からの改善も考える必要がある。

とはいえ、これは問題のとらえ方の根本に関わる部分であり、前もって教員側からの何らかの手だてが必要であろう。ただ、これについても、ディベート終了後、教員が視点の広がりや資料蒐集についてコメントをつけると、多くの生徒がうなずきながら聞いていた。実際にディベートの中でもどかしさを感じたり、ディベートを聞きながら物足りなく思ったりしたことで、生徒自身が納得しながら聞くことができたのではないだろうか。失敗の中から学ぶことの価値を痛感した場面であった。

九

収集した資料から重要な部分を抽出したり、分類したりという作業はよくできていたが、そこから分析、すなわち原因や関連を探ったり、問題点に深く迫っていったり、深めていく過程の指導が今後必要になってくるだろう。

生徒の気づきを見ると、多角的な視野が必要であることや、自分の考えを確立して、考えを深めていく必要性を感じているものがある。「知識」ではなく「知恵」がいると言った生徒がいたが、至言といえよう。

■小論文の指導

ディベートを経て書かせた小論文は、確かに全員が抵抗感なく取り組め、ある程度の分量、中味のものが書きあげられたという点では評価できる。しかし、共通の資料をもとに書いた生徒もおり、似通ったものになってしまい、個性的なものやディベートの段階よりももっと発展した内容になっていたかという点では疑問が残る。

たとえば、ディベートが終了した時点で、肯定側、否定側の問題点の整理をし、共通する問題点を明らかにし、その共通の問題点を解決する主張を考えていくという手順を指し示していくことも、視野を広げ、問題を掘り下げるに有効な一方法であろう。

■小論文の評価

小論文指導において教員が最も苦痛・苦労に感じるのは、添削であろうか。中味の検討となると、国語の教員でもかなりの時間を要するのが現状で、その点から他教科の先生は尻込みする傾向にあるのではないかと推察される。

今回の試みは、「だれでもできる小論文指導」を目指している。その一つが生徒同士の相互評価をメインにした点である。生徒同士の相互評価はかなり的確で、仲間の言葉であるだけに教員が言うよりは説得力、切実感があるようだ。また、他の生徒の小論文を読むについても、評価を行う立場で読むということで、評価基準や視点を意識し、相談などもしながら読んでいた。これこそが、自分の知識を深めていったり、小論文を書く意欲喚起に役立つと思われる。

一度の小論文指導で書けるようになるはずなどないことは自明である。継続と積み重ねが不可欠であるならば、教員側の負担軽減の点からも、生徒自身の成長のためにも相互評価をメインにすることが効果的なのではないだろうか。

■今後の小論文指導への展望

今回の実践は、国語科の現代文の授業内での実践であったが、一教科だけが限られた時間内で指導していくこと自体に限界があるのは異論あるまい。一つのきっかけとして、国語科で実践していくことは可能だとしても、持続した指導のためには、他教科との連携や総合学習での実践が必須条件である。

小論文指導は書き方の技術教授ではない。意欲的に取り組む姿勢の中で思考を鍛えてこそ書けるものであり、またそうであるからこそ書きながら、さらには書き終えて思考を深めることができるのである。テーマ自体の広がりを考えただけでも、その幅広さに他教科との連携の必要性が痛感できよう。そのためにも、小論文指導の筋道を確立していくことが必要である。「ディベートから小論文へ」の流れ出た成果は大きかったように思うが、そのことを本当に実のあるものへと継続していくためには、更なる実践が構築されねばならない。

五　おわりに　―誰でもできる小論文指導のために―

小論文指導は生徒の思考を鍛え心の成長をめざすものであると考えたい。真に実のある指導のためには、繰り返し継続することと、多角的な支援が必要である。それを可能にする方策として、本稿で提言したいのは、誰でもできる小論文指導である。

まず、ディベートを生徒に運営させること。

目的をはっきりさせた上で、役割分担や手順を決めれば、生徒は主体的に考えながら動くことができる。たとえば時間配分等を考えて、教員の指示よりも先に部屋の準備に取りかかっていたのは、何をなすべきかが理解できていたからである。また、すべての生徒が何らかの形で運営に参加することを通じて、全体の流れを把握し自己の責任を理解できるようになる。

次に、ディベートを繰り返すこと。

最低でも二回は行いたい。学習は反復によって身に付く。同様に、反省の上に立って再度ディベートを行うことで、反省が生かされてこよう。ただし、目標は同じではない。資料集めの段階、発言の準備段階等、具体的な各段階において、学習者自身に明確な目標を立てさせることを忘れてはなるまい。

さらに、小論文の評価を生徒の相互評価に委ねること。

生徒に公表する文章であるとの自覚を持たせることで、文章に責任感が生まれる。何の準備も経ていない場合には、それはとかくプレッシャーを生みがちであるが、ディベートを経ての場合には、意外なほど抵抗感無く取り組めるようである。また、同級生の文章には関心が高い。しかも、そこに自分が評価するという意識が加わると、読む姿にも一層の真剣さが見て取れた。しかも、評価する立場を経て、再度自分が書く側になるとき、評価の視点が有形無形に生きてくるのではなかろうか。

多様な教員集団で取り組むこと。

テーマを見ても明らかなように、ジャンルは多岐に亘っている。国語科の教員だけでは、多様な観点からの支援が望みにくい。まず、子どもたちに必要なのは行儀のよいまとまった文章を書く力ではあるまい。興味を持ってテーマを掘り下げることのできる教員集団には多様な教科からの参加が望ましい。

生徒自身が活動することが継続の原動力である。教員の個々の努力をあてにするよりもよほど意義のある学習がそこでは展開するに違いない。今回、三人がそれぞれのクラスで取り組んでみた。その結果、教員に依存しないこうした形での小論文指導は可能であり、有効であるという感触を得たことが、今回最大の成果であったと言っても過言ではあるまい。

大切なのは、誰でもができる形で小論文指導を継続すること、そしてそれができる態勢づくりではなかろうか。